

天文七年から安永七年までの記事で、巻頭に源政本の序があり、内題に記録とあるのは政隣記録を略したものと思はれる。第十二冊から第三十一冊までは、安永八年から文化十一年八月までの記事で、内題を耳目甄録とし、その第十二冊には『是迄題目政隣記録之處改之』とし、又安永八年蕨朝源正鄰の序がある。以上合はせて外題は『政隣記録』である。

國寺より進山し、九年三月隱居、同年九月三日遷化した。

曹洞宗に屬する。もと駿河志田郡島田に青林庵があつたが、明治四十三年この地に移り、大正二年七月之を青林寺と改めた。

科醫。明和六年召出されて二十人扶持を受け、寛政四年更に十人扶持を加へられた。

谷)に在つて、眞宗東派に屬する。

原信吾の四子で、定番御歩關口甚兵衛に養はれた。安政三年初めて算法を瀧川友直に學び、後藩の履教師長州人戸倉伊八郎に就いて西洋數學の一端を受け、遂に英語を獨習してホットン・チャンパー・トード・ハンダー等の數學書

セイロク 清六 能美郡苗代郷に屬する部落。

甚だ多かつた。開明治十七年四月十二日享年四十三を以て歿するに至るまで學校に教鞭を執り、又衍象舎を開いて諸生に教授し、門下俊材を出たこと多く、實にこの地方に於ける西洋數學の鼻祖であつた。大正四年十一月十日特旨を以て従五位を追贈せられた。その著書又は譯書は左の通りである。

セガサキ 瀬ヶ崎 鳳至郡赤崎の部落から北方の小岬で、一名を達磨崎といふ。

新撰數學二冊 點算問題集二冊 幾何初歩二冊 幾何初學例題一冊 (以上刊行)

セガハラウド 瀬川藏人 初め興兵衛。慶長八年前田利長に仕へて百石を受け、寛永元年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

算法窮理問答三冊 新撰數學二冊 點算問題集二冊 幾何初歩二冊 幾何初學例題一冊 (以上刊行)

セキ 席 又御席ともいひ、藩の執政老臣の事務室のことである。『御異風裁許、席へ出、御打御御式首尾能相濟候旨申聞候。』といふ如くに用ひられてゐる。

數學稽古本一冊 平三角一冊 測量二冊 孤三角一冊 航海曆用法一冊 對數表二冊 微分術一冊 答氏微分術譯二冊 微分術附錄一冊 答氏孤三角術抄譯一冊 答氏平三角術抄譯三冊 答氏幾何學五冊 答氏積分術二冊 答氏代數學五冊 答氏圓錐形截斷術二冊 答氏靜力學一冊 (以上未刊)

セキガキ 席書 寺子屋では、毎年一次、寺院などを會場に宛て、同窓新舊の門生を集め、衆人環視の間に大小隨意の文字を書し、之を席書というた。席書は兼ねて揮毫して置いた作品と共に壁上に貼布し、以て來賓の展觀に供した。

答氏圓錐形截斷術二冊 答氏靜力學一冊 (以上未刊)

セキキヨコドウ 石居巨道 金澤曹洞宗寶圓寺二十代の住持。安永六年九月攝州吹田護

セキゲンテキ 關玄迪 元越中高岡の町醫

であつたが、天明五年御醫師として召出され、寛政六年歿。その子玄迪如馬(初玄郁)之に繼いだ。

セキサイ 釋菜 加賀藩の學校の釋菜の禮は、創立以來毎年元旦明倫堂で之を行つたが、天保十年から二月上旬となり、若し事故があれば、二月中旬・八月上丁・八月中丁にも延期せられた。孔子の像は、初め畫像を用ひたが、天保十年以後明の朱舜水の書いた至聖先師孔子神位の木主を安置した。これは曾て前田綱紀の命じて造らしめたものであつた。この日、學校主付以下の教職員一同出校し、莊嚴な式を挙げた。神前の奠供は大鯛一頭・上白米一升・白黒餅一重(黒は胡麻入)・酒・芹・からすみ・時菓(春は九年母・枝柿の類、秋は梨と葡萄の類)であり、祭器は銀製爵提子・土器杯・香爐・水指各一の外、拂巾布一尺・三方・案のみであつた。係の執事は廉者二人・性香一人・奠者二人・執爵一人・祭酒二人である。この釋菜を俗に聖前儀式ともいひ、明治元年二月仲丁に行はれたのが最終であつた。

セキザハアキキヨ 關澤明清 通稱孝三郎。房清の子で、初め壯猶館に蘭學を修め、文久中加賀藩の選抜によつて江戸に留學し、江川太郎左衛門及び村田藏六に従ひ、次いで長崎に往き、慶應二年前田慶寧の藩侯となつてから、岡田秀之助と共に、英京倫敦に留學を命ぜられ、三年を経て歸國、明治二年致遠館の教師となつた。後年諱を以て名とし、内務省・農商務省の技師に歴任し、能く水産を保護奨勵し、廿五年官を辭して千葉縣館山製造所を購ひ、自ら漁船を指揮して金華山沖に抹香鯨を捕へた。我が國抹香鯨を獲ること明清

に初るといふ。明治三十年一月九日五十五歳を以て歿。

セキザハナホフサ 關澤尙房 通稱安太郎。助九郎・安左衛門。寶曆十二年父齋記成房の遺知百五十石を襲ぎ、組外に班し、後大小將となり、御膳奉行・御使番に任じ、寛政十八年物頭並に昇つて百石を加へ、文化五年御先簡頭に進み、八年閏二月十六日歿した。

セキザハフサキヨ 關澤房清 通稱爲次郎。六左衛門、後安左衛門。告老の後遜翁と稱した。天保二年家を襲ぎ、祿二百五十石を受け、馬廻組に班した。後房清本吉の奉行となり、十一年その説容れられざるを以て辭したが、弘化四年又割堀奉行に補せられ、年寄長連弘を輔けて舊弊を改革し、嘉永六年には小松馬廻番頭に轉じ、町奉行を兼ね、次いで安政元年謹を蒙つて職を免ぜられ、五年又重謹を得て逼塞を命ぜられ、文久三年宥され、能登に移つて在番となり、元治元年京都に役した時、恰も蛤御門の變に會し、禁闕を守備して功があり、因つて頭並に進み、又割堀奉行を兼ねた。明治元年伏見鳥羽の變に、房清京都から走せて變報を金澤に致し、以て一藩の方針を定めしめ、北越の役には藩の監軍となつた。後徵士に擧げられ、越後府民政局に出仕し、權判事に任ぜられ、晩年東京に住し、明治十一年七月八日七十一歳を以て歿した。

セキザハロクダウ 關澤六太夫 前田利常に仕へて百石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。

セキシゲヒテ 關重秀 加賀藩の老臣村井氏の臣關善左衛門の子。文政元年八月藩士の列に加へられて采地百五十石を賜はり、組外